

ウラナミシジミの裏面斑紋に異常を認める記録

島崎正美・島崎能子

ウラナミシジミはほとんど異常型をみない蝶だが、裏面の波状斑紋に広範囲の異常がみられる珍しい個体を観察したので報告する。

2024年10月7日、例年より約2週間遅れて開花した彼岸花を観賞する目的で加古川市郊外の田園地帯を訪れた際、彼岸花にカメラを向けていた妻が奥の方に蝶が止まっていると教えてくれた。この日は時折小雨がぱらつく天候で、彼岸花の群落の間に自生するエノコログサの花穂にとまって休息中の蝶が後翅を破損したウラナミシジミ（図1）であることはすぐにわかった。ビデオカメラでズームアップしながら撮影記録をとったが翅表が見られないままで雌雄の判別はできていない。撮影中と帰宅してコンピュータに画像を取り込んだ段階でもやや灰色が目立つという感じはしたが裏面斑紋の異常には気づかなかった。

2024年の初秋はウラナミシジミの観察機会が少なく、10月9日に三木市の三木山森林公園までツマグロキチョウの観察に出向いた際、曇り空のせいで池端の植物にとまって動かないウラナミシジミ（図2）を撮影すると、ファインダーにみる裏面の波状斑紋がくっきりと目立ってその色調もよくみる淡褐色で、この時点で10月7日に撮影した個体の裏面の色調が一様に灰色を帯びていたことを思い出した。

2個体の撮影記録を見比べて初めて10月7日に記録した個体の裏面が、特に後翅の中央部外よりに通常上方2番目で幅広く下方に向けてほぼ直線状で細長く続く筋



図1. 異常型. 2024年10月7日, 加古川市志方町広尾.



図2. 2024年10月9日, 三木市三木山森林公園.

模様が、三日月状に湾曲した連続紋になっているなど、全面的に正常個体とはかなり違った斑紋異常型だと確認できた。先述したように雌雄は不明で正常型との翅表の違いもわからないままだが、以下に改めて斑紋異常型の観察データを示す。

観察日 2024年10月7日

観察地 加古川市志方町広尾

発見者 島崎能子

撮影者 島崎正美

日本産蝶類の変異・異常型図鑑を公表されておられる新田氏の記録の中にウラナミシジミ2個体の例が見られるが、今回のような斑紋異常は初めての記録だと思われる。

○参考文献

新田敦子, 双尾 II. 日本の蝶類 変異・異常図鑑 (URL: https://abzukann.choumusubi.com/simpleVC_20101216171845.html)

(Masami SHIMAZAKI 兵庫県高砂市)

(Yoshiko SHIMAZAKI 兵庫県高砂市)

キタテハ夏型の遅い記録とヒメアカタテハの誤求愛

島崎正美

2024年は6-8月の異常高温のせいで夏期に蝶の姿が少ないなど発生状況に例年とは異なる変化が見られた。FacebookなどのSNSにキタテハの秋型の情報が多くみられるようになった10月、例年であれば秋型のキタテハがセイタカアワダチソウの花に集まる、加古川河川敷へ11日に訪れた。しかしカナムグラが広く群生する場所で探すがキタテハは全く現れず、セイタカアワダチソウを訪花したツマグロヒョウモン雌雄個体、センダングサ周りを飛び交うモンシロチョウとヤマトシジミ、カワヤナギの葉上でテリ張りをするコムラサキなどを見ただけだった。翌12日14時過ぎの訪問でも、観察できる蝶はカワヤナギまわりで同志の追飛翔を繰り返すコムラサキと、絡み飛翔に巻き込まれるルリシジミ、そしてカワヤナギの葉上に静止するコムラサキの♀などで、キタテハがやってくる気配がないまま時間が過ぎていった。15時半を過ぎた頃、ようやく低い位置で旋回飛翔するタテハチョウが現れ、カナムグラの葉上に静止した時点で紛れもないキタテハ（図1）だと確認。ほぼ新鮮な夏型で、飛翔時に秋型のオレンジ色がみられなかったわけが納得できた。幅広い翅形から産卵目的でやってきた♀

だと思われたが、目の前で産卵することはなくどこかへと姿を消した。夏場の異常気象が影響したのか、この時期の夏型の観察は記録のある1980年以降にはない珍しい事例となる。ちなみに、加古川地域での秋型の発生は10月10日以降という記録が多い。

同月12日は、継続観察をしていたコムラサキの追飛翔にも変化があった。カワヤナギの葉上に静止していた♀への♂による求愛行動が始まり、高い位置のカワヤナギの葉陰へと絡みながら潜り込む様子(図2)を観察していると、低い位置で求愛行動をみせる別の2個体が現れ、こちらが撮影に向いていると判断して撮影対象を変えて様子を見た。ところが両者がコムラサキではないように見え、カメラのズームアップ度を上げるとなんと尾端をまげて交尾を迫るのはいつの間にも現れたのかヒメアカタテハで、迫られているのはおそらく先ほどみたキタテハだと思われた(図3)。この求愛行動は5分近く続いたが、ヒメアカタテハの動きがとまって交尾が成立する可能性は低いと考えられ、高い位置の望遠撮影にも疲れて最後まで撮影はしなかった。

野外での異種間の自然交尾の例としてクモマツマキチョウとツマキチョウの例が有名だが、極めて珍しいミヤマカラスシジミとトラフシジミの交尾例がWeb検索で閲覧でき(蝶超天国, 2019)、筆者も2014年に高知市五台山牧野植物園で観察されたカバマダラに誤求愛をするツマグロヒョウモンの♂の記録を中川氏との共著で報告している(中川ら, 2014)。2020年には同種間となるヤマトシジミの♂が他の♂に羽ばたきを繰り返して誤求愛をする場面を観察(図4)して、求愛される

側の♂はじっとしたままだった。ヤマトシジミの♀は低温期になると翅表に青鱗粉が発達した個体をみるが、この時の迫られる側の♂の翅表外縁には黒鱗粉が発達していて、この誤求愛は迫る側の♂が相手を低温期の♀だと誤認識した可能性が考えられた。

今回のキタテハとヒメアカタテハの事例は交尾にまでは至っていないが、通常ではありえない異種間誤求愛例だと思われ、キタテハの遅い夏型の確認例と合わせて報告する。

観察データ

観察日 2024年10月12日

観察地 高砂市米田古新

観察者 島崎正美

○参考文献

中川隆・中川美智枝・島崎正美, 2014. カバマダラに対するツマグロヒョウモン♂の誤求愛. やどりが, (240): 38-39

蝶超天国, 2019. ミヤマカラスシジミとトラフシジミの交尾 (URL: <https://konty33.exblog.jp/28449277/>)

(Masami SHIMAZAKI 兵庫県高砂市)



図1. キタテハの夏型.
(2024年10月12日 高砂市米田町古新)



図2. コムラサキの求愛.
(2024年10月12日 高砂市米田町古新)



図3. 尾端を曲げて交尾を迫るヒメアカタテハ.
2024年10月12日 高砂市米田町古新)



図4. 同種の♂に誤求愛するヤマトシジミ♂.
(2020年9月18日 高砂市荒井町)